自然賛歌

廿日市市の木・桜

妹尾　治人

春は、百花撩乱。野にも山にも花が咲く。なかでも桜は日本を代表する花で、桜前線の声を聞くと、いよいよ春本番、心が躍る。

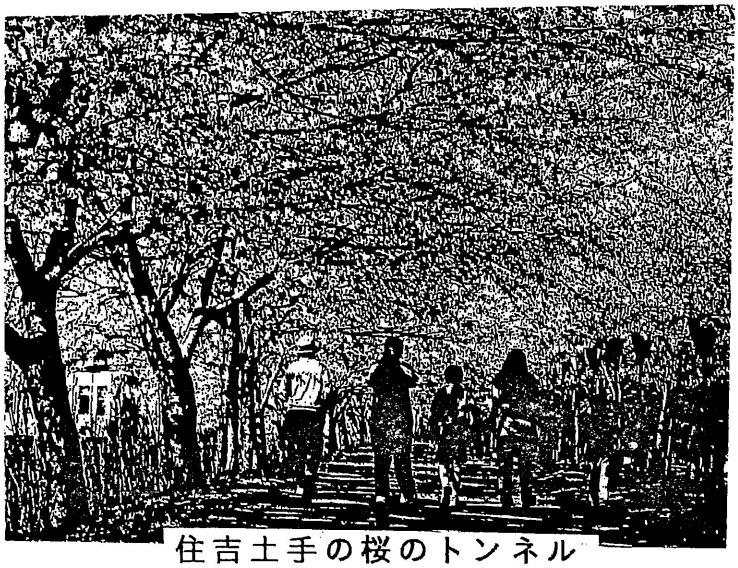
廿日市市には、桜の名所が沢山あるが、現在では住吉の桜土手と極楽寺山憩の森が有名である。一昨年開園した後畑の「さくらの里」も、近い将来花見のメッカになるのではなかろうか。桂公園・JR廿日市駅・川末蓮光院の桜は古木となったが、今でも立派な花が見られる。その他、地御前神社・扇公園・阿品台公園などの桜も見逃せない。

桜の種類を図鑑で調べてみると、野生種は一五種類ほどであるが、園芸種・変種が多く、合わせると七〇種以上になる。桜前線の基準にされる花は、園芸種のソメイヨシノ（染井吉野）で、そのつぼみの目方で開花の予想がされることはよく知られている。

住吉土手の桜はソメイヨシノで、その数三一〇本。それに花見時には二〇〇本の雪洞（ボンボリ）が立てられ、さくら祭りが行われる。昼の花見を逃した向きには、雪洞の下で夜桜を楽しむのも格別の風情がある。うっかりしていたら花は散り、気付かぬうちに葉桜となってしまう。

ソメイヨシノが終わったら、極楽寺山に登ってみよう。道中、山桜が山を白く埋めるほどに自生しているのが見られる。憩の森広場には、オオシマザクラ系の八重桜が多く植えられ、その中に御衣黄（ギョイコウ）という緑色の花を咲かせる桜がある。八重桜は、四月下旬から五月連休頃がよい。

こうして廿日市市では、ソメイヨシノから始まって山桜・八重桜と一ヵ月以上桜の花が楽しめる。



住吉土手の桜のトンネル

桜は、花を愛でるだけでなく、いろいろと利用されている。花は塩漬けにして目出度い席の桜茶に、葉は桜餅に（毛のないオオシマザクラがよい）、材は赤味を帯びて美しく丈夫なので、建築・彫刻・家具に、樹皮は極めて強靱で、磨けば磨くほど艶が出るので細工物に、セイヨウミザクラの実はサクランボ、ウワミズザクラのつぼみは塩漬けにして杏仁香（アンニゴ）と名付けて土産物に、その他、染料、薬用と実に幅広く利用されている。

〃広報はつかいち〃に「はつかいちの植物」と題して、関太郎さん、のやさしくてわかりやすい解説が続けられているが、その第一回（平成元年四月一日）に、廿日市市の木「サクラ」が掲載されている。第二回は、廿日市市の花「サツキ」続いてクレソン、アジサイ、ジュンサイ……と続き、今年四月で実に、一三三回となる。この植物シリーズは、大好評でファンも多く、第一回から全部切り抜いて保存している人もある。

園芸種の桜は、生長は早いが病虫害に弱く、寿命が短いので、桜を観光の目玉とするには手入れをするとともに、計画的に更新していく必要がある。試験に合格したことを「サクラサク」というが、桜は春の使者。人間に春の歓びと勇気を与えてくれる。

〃厳しさを耐えて嬉しやサクラサク〃

自然観察指導員